

地域アートプロジェクトの深層効果

渡邊 太 (Futoshi WATANABE)

【研究の背景と目的】

本研究は、地域アートプロジェクトが個人の生活や意識にどのような作用を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。2000 年代以降、全国各地で主として地域活性化を目的として、大規模な芸術祭や地域アートプロジェクトが実施されてきた。

多くのアートプロジェクトには、何らかの形で公的な助成金や企業メセナの協賛金が活用される。財政的支援を受ける以上は、支援に応じた効果を示す説明責任を負う。1990 年代以降、行政部門の効率化を目的とするニュー・パブリック・マネジメントにもとづく行政評価が盛んに導入され、芸術祭やアートプロジェクトへの支援を含む文化政策においても客観的な指標にもとづく評価が求められている。アートプロジェクトの効果を測定するためのわかりやすい指標は、集客数やイベント実施回数などの数量的把握である。だが、数量的に測定可能な指標で把握できる効果は一時的・短期的なもので、アートプロジェクトがもたらす効果のうち表層的なものにすぎない。

アートプロジェクトの効果を単に観光などの文化消費としてのみとらえると、結局は「儲からなければ文化ではない」⁽¹⁾といった短絡的な発想に陥る。文化政策学では、芸術文化への公的支援について、短期的な見返りではなく文化を通じて市民の社会参加を促し、創造環境を整備することで労働の質や生活の質を高めるといった長期的な成果が注目されている⁽²⁾。

本研究では、アートプロジェクトが地域住民の意識に対して及ぼす深層的な効果に着目する。アートプロジェクトは、芸術的実践を通じて参加者の意識を揺さぶり、いままで考えたことがなかったことを考えたり、意識していなかったことを意識させたりすることがある。未知への扉を開くことは創造性の源泉である。アートプロジェクトが関係者や参加者の意識にどのような変革をもたらすのか。事例研究として、倉吉市明倫地区で 2010 年から始まった「明倫 AIR」をあつかう。「明倫 AIR」は、持続的なアートプロジェクトであるため、中長期的な効果を把握する本研究の目的に適している。

<<註>>

(1) 堺屋太一「第 2 回大阪府市統合本部会議資料」(2012 年)にみられる表現。同会議で堺屋は、「お金のもうからないものは文化ではないというのが大前提」と発言している。特別顧問を務めた堺屋の一連の言動は、伝統文化や実験的な芸術への支援を削減する一方で企業が儲かる民営化と消費文化の発展に尽力する大阪維新の方針と密接に関連していると考えられるべきだろう。

「資料」<http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/15336/00091284/240112shiryo3.pdf> (2019/01/18 閲覧)、「議事録」<http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/15336/00091284/240124gijigaiyo02.pdf> (2019/01/18 閲覧)

(2) 後藤和子『文化と都市の公共政策』有斐閣、2005 年。また、企業メセナと創造経済について論じた加藤種男は、芸術文化への社会的投資が経済的波及効果にとどまらず、新たな価値を創造する力を強調している。加藤種男『芸術文化の投資効果』水曜社、2018 年。

○共同研究者・協力者

岡田 有美子 (明治大学大学院 理工学研究科 博士後期課程)

【概要】

本研究では、まずアートプロジェクトの評価に関連する文献調査（その概要は前頁を参照）をおこない、質的な指標を用いた評価の重要性を確認した。そのうえで、事例調査の対象となる「明倫 AIR」の概要を把握するため、資料の収集と関係者からの聞き取り調査を実施した。

「明倫 AIR」の「AIR」とは、アーティスト・イン・レジデンスの略称で、アーティストが地域に一定期間滞在して、住民と交流しながら作品制作をおこなう事業を指す。「明倫 AIR」が始まった背景には、旧明倫小学校円形校舎の保存をめぐる住民運動があった。円形校舎は老朽化のため解体が決まっていたものの市民の間から保存を求める声があがり、2009年に円形校舎を用いたアートプロジェクトが実施された。円形校舎はその後、市から円形劇場へ譲渡され、耐震補強と改修を経て2018年に「円形劇場くらしフィギュアミュージアム」がオープンする。そうした流れのなかで、明倫地区のこれからの100年を考えるために有志が集まり、NPO法人NEXT100が設立された。「明倫 AIR」はNEXT100の事業のひとつで、2010年に始まり2018年度で第9回目を迎える。

昨年度「明倫 AIR2017」の招聘アーティストは中村絵美と久保田沙耶の2名（中村はディレクターを兼務）だった。ふたりは倉吉の郷土作家・長谷川富三郎に注目する。長く倉吉で学校教員として勤めながら版画を制作し、地域の芸術文化振興に貢献してきた長谷川富三郎の作品は、倉吉の町中のあちこちで見ることができるほど、地域に根づいている。中村と久保田は長谷川富三郎を現代の視点から再評価し、長谷川富三郎作品を通して、倉吉の町を重層的な視点からとらえ直した。「明倫 AIR2018」では、前年から引き続いて久保田沙耶が招聘された。久保田は、長谷川富三郎が活躍していた頃の民藝運動やジャンルを超えた芸術家の交流に着目し、現代を生きるアーティストとしての自らの活動と重ね合わせながら、芸術と地域の関係を考察し、表現としての昇華を試みる。

関係者への聞き取り調査から、アートプロジェクトへの参加が新たな表現活動のきっかけとなること、日常的な活動の場を拡大する効果があることがわかった。また、招聘アーティストの久保田沙耶は「明倫 AIR」での表現活動を通じて5年がかりで倉吉の町とかかわることを選択した。アーティストもまた、アートプロジェクトへの参加を通じて自らの表現に影響を受けるのである。

じつは本研究を実施するなかで私も郷土作家・長谷川富三郎への興味が湧き、「明倫 AIR2018」における久保田沙耶のプロジェクトに巻き込まれることになった。「明倫 AIR2018」のプログラムのひとつに倉吉博物館でのロビー展示があるが、その際に、長谷川富三郎作品とそれをモチーフにした久保田沙耶作品と並んで、倉吉の町のあちこちに飾られている長谷川富三郎作品について私たちが調査した記録をパネル展示することになった。出会った者をうっかり巻き込む力がアートプロジェクトの魅力でもあり魔力でもある。ひとが、それまで思ってもみなかった方向へ一歩踏み出すことを促すことができるとすれば、それが新しい価値を創造するアートの力といえる。

【成果・課題】

本研究では、事例調査によりアートプロジェクトの波及効果の一例を示した。芸術制作の過程や成果に触れる経験は、ときに個人の人生を揺さぶる。それは芸術を通じて地域に蒔かれた創造性の種子のようなものといえる。本研究の成果は、小冊子として印刷し配布する。

本年度は、本格的な調査に着手したばかりでもあり、基礎的な資料収集と調査協力者との信頼関係を築くことに調査期間の大部分を費やした。そのため十分な数のデータを収集することができなかった。調査協力者の範囲を拡大し調査データを蓄積していくことが課題である。

研究成果の関連企画

- ・市町村連携事業ギャラリートーク「となりの富三郎 ～生活とともにある芸術～」久保田沙耶（芸術家）、渡邊太（社会学者）、岡田有美子（キュレーター）、倉吉博物館、2019年2月10日。